

生物物理若手奨励賞について--第2回選考経過報告

美宅成樹

沖縄年会第3日目のバンケットは、若手賞の発表で大きな盛り上がりを見せた。日本生物物理学会の懇親会は年齢若い学生たちでごった返し、大いに活気付くのだが、それはどちらかといえばメリハリのない喧騒の中で終わる。しかし、今年の若手賞の発表は、受賞した人だけではなく、友人たちの輪ができ、胴上げもあった。若手の人たちが喜ぶ姿を見て、日本生物物理学会の明るい将来を感じた人は多かったと思う。

若手賞というのは、石渡前会長が提唱し、昨年からはまった賞である。日本生物物理学会では、これまでも賞を創設するかどうかの議論はされてきたが、評価の難しさなど色々な問題を解決することができず、実現はしなかった。しかし、石渡前会長の強い指導力によって、評価のやり方を工夫し、若手研究者に元気を与えることを目標に、若手賞がはまったのである。年会の発表申し込み時に、同時に若手賞の応募書類も出してもらおう。それを書類審査する第1次審査で、10人を選ぶ。その人たちに口頭発表の機会を与え、それを審査するのが第2次審査である。そして、最終的に5人の若手が受賞の榮譽を受けることになる。生物物理学という学問分野は非常に広いので、全ての分野というわけにはいかないが、主な研究分野をカバーするには5件くらいは必要だと考えられるのである。

実際に審査を始めて起こってきた問題は、審査がかなり大変だということである。第1回の若手賞で審査を行った人は、一様に審査が大変だったと述べていた。今回は応募件数が昨年より少し少なかったもので、少しは楽だったかもしれないが、これは解決すべき問題である。しかし、受賞する人たちは、良い研究はしているが社会的にはこれから自らを確立していかなければならない人たちであり、審査している人たちはすでに研究者として確立した人たちである。学会の活性化のために、大変な審査の労力もやむを得ないことではないかと思う。

もう一つ気になることを指摘しておきたいと思う。それは昨年今年と、女性が一人も若手賞の候補に挙がらなかったことである。しかし、年会のポスター見てまわると、若い女性の研究者(大学院生)の良いポスターが多く見られる。若手賞に積極的に応募する人が少ないだけではないか。まわりからも背中を押してあげていただきたいと思う。